

先日、ある婦人から蘭の一鉢をいただきました。あまりの見事さに花弁に手をやつてみると、なんとこれが紙で造った造花。大変失礼な話ですが、素人の手でよくもこんなに立派なものが——と驚いた次第です。

その婦人が話されるには——デパートの手芸品売場で見かけ、何となく自分でも作れそうな気がして材料を買って帰ったのが始まりで、何度も失敗をくり返しながらも根が好きなのでしょうか、いつの間にか部屋中花でいっぱいになりました。これを知った隣のおばさんも見よう見まねで花づくりの楽しみを覚えましたが、喜ばれたのは若いお嫁さんの方で、おばあさんの小言も聞かなくなり、家の中はきれいになりましたとのことでした。この頃は週一回養老院へ奉仕に行っていますが、ここでも大変喜ばれましてね——。

この四月から、兵庫県では文化局が発足しました。

×

×



くらしに 心の文化を

山本 敏雄

〔兵庫県文化局長〕

★わたしの意見

文化というと、ともすれば古典芸能やクラシック音楽だけのように思われるがちですが、実は文化こそ身近ななり、心のめざめを啓発し、そしてお互いの行動と参加により、心豊かな地域社会を創造しようと願っています。

文化というと、ともすれば古典芸能やクラシック音楽だけのように思われるがちですが、実は文化こそ身近ななり、心のめざめを啓発し、そしてお互いの行動と参加により、心豊かな地域社会を創造しようと願っています。この婦人の花づくりも立派な文化であり、そこの人間のいきいきとした生命の躍動を感じます。

このところ文化センターなどで、趣味の教室がにぎわっていますが、これとても暮らしの中に文化が芽生え、育つているものと思いますし、ちょっとした創意と努力によって、私たちの生活の周辺も、ずいぶんと明るく住みよくなるのではないでしようか。

物質としての富と、心としての文化が調和するところに「しあわせの原点」があると考えるとき、いまこそ心の豊かさの充足をみんなで心がけたいのです。

MAKE UP WITH ROYAL

50年の 伝統と信用 を誇る

度付サングラスお試えの絶好期
です。



神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 (321)1212代表

三宮店・さんちかタウン (391)1874~5

元町店は毎水曜日がお休みです

三宮店は第2、第3水曜日がお休みです

三宮店が
売店と喫茶室の装いを
かえました
ぜひ見てやって下さい
お待ちしています



ドイツ菓子

Fuchsim's

ユーハイム

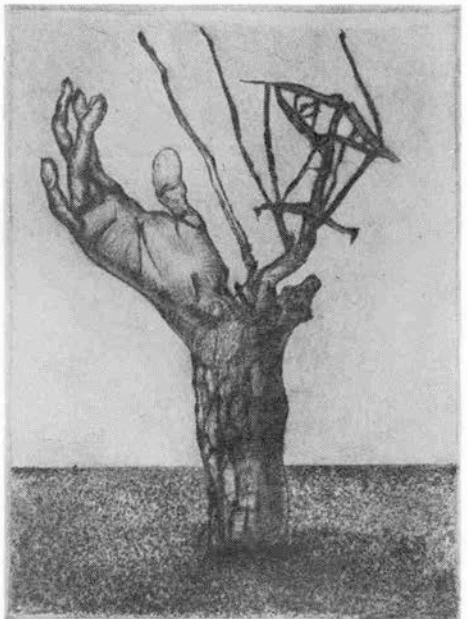
このマークの店でお買求め下さい

本店 生田神社前 TEL(331)1694

三宮店 神戸大丸前 旧市電筋 TEL(331)2101

さんさか店 三宮地下街スウィーツタウン TEL(391)3539

隨想三題



カット／上野省策

神戸

その自然と私

上野

省策（画家）



いつの頃であったか、神戸市の山手、学校や、教会の多い通りを、西灘駅ちかくの動物園の方へ下つてきた。

ふと、目をあげると、大阪湾をのぞむ、広い、広い、眺望が目の前にひらけた。季節は春であったか、全体に、青みがかった灰色の眺め、左手には、はるかに、なだらかな六甲の山並がつづく。私の生まれた越後

にも、かつて住んだ東京にも、決して感じることのない、不思議に温かい、そしてハイカラな情緒が、たちまち私の全身に流れた。この時の情感は決して忘れることのない、それほど深いものであった。

私が神戸の街に最初に関心をもつたのは、ずっと以前、小松益喜

だときであった。この絵を見て、

私は、はつきりと作家の名前と神戸の街と店の絵が、展覧会に並んだときであった。この山と海にはさまである。

華岳は明治大正の画家の中、眞に天才とでもよべる最高の画人であつた。その偉大さは年とともに

いた。しかしながら、ハイカラで温かい感じは、小松さんの絵の印象とはすっかり違つた街になつて

いた。しかしながら、ハイカラで温かい感じは、小松さんの絵を思い出させた。当時、教育学部は赤塚山にあつたが、山を下つて

帰途につく道は全くのしかつた。古い街道の方を通つて、角の酒屋で一杯ひっかけ降りてゆく。

かたわらに石だたみの小流れがあつて、澄んだ水が潺湲と流れれる。昔、酒づくり用の水車をまわした小川と聞いた。深田池の近くには大きな料亭があつて、そのあたりの樹々の緑は多彩をきわめ

た。とくに晩春、初夏の頃には、黄緑、白緑、金茶色、緑褐色、青緑、それにまじって黒ずんだ松の緑、等々、口では言い表わすことのできない緑の大交響楽であつた。こうした色彩は静岡以北では見ることができない。私は小出楨重、梅原龍三郎、安井曾太郎などの画家を生んだ関西の土地を感觉的に理解した。六甲山のふもとに通いながら、ついに六甲山にのぼらなかつた。絵にも描かなかつた。のぼれないのは年の故であるが、絵に描かなかつたのは、村上華岳の六甲の絵が頭の中になつたからである。

華岳は明治大正の画家の中、眞に天才とでもよべる最高の画人であつた。その偉大さは年とともに正しい評価をうけるだろう。神戸の花隈にすんでいたことも知つてゐた。ともかく華岳の六甲山を描いた優れた作品には、只美しいとか、深い調子があるとかいうよりも、何とも言えない靈気がたただよ

つてゐる。いつかいつかと思いつくなどは死んでゆくだろう。

この六甲山を昨年の秋、友人につられて、ケーブルで山頂から見おろした。これは素晴らしい景観であった。山と海、そのひろがり、まことに偉大な自然のいとなみを見る思いがした。この風景をもっと日本中の人に見てもらいたいと思う。今でも、月二回学校に教えにゆく。

うれしいことだ、こよなく愛する街神戸。私の心は、一生、神戸をはなれないだろう。

一絃琴の自家撞着

小池 義人

(須磨寺副住職・一絃須磨琴保存会会長)

先日、私たちの須磨琴保存会が主催で一絃琴の全国大会を開催したのであるが、おかげで、押すな押すなどいうほどではないまでも、終始大入り満員の盛況裡に大会を終了することができた。どこで聞きつけたのか、中には東京、名古屋、松江、広島のような遠隔地から、わざわざ来聴された方もあつたのには、主催者の私たちの

方が驚かされたことであつた。

ところで、その日、同じく来聴者の某邦楽器店の社長がもらされた言葉に私は考えさせられるものがあった。

「こんなもの凄い人気は他の邦楽の演奏会では見たことがないし、また、絶対にあり得ないことですよ」というのである。勿論、その社長はこの言葉を私たちに対する賛辞としてもされたのであるし、私としてもこの大会が他の邦楽では「絶対にあり得ない」ほどの成功をおさめたことを喜んではいるのである。

しかし、この言葉は、少なくとも現在のところ、一絃琴が他の邦楽とは違つた面で受けとめられていることをいみじくも物語つている。つまり、一絃琴が珍しいからこそ、これだけの人気を博したのであり、もしも一絃琴が他の邦楽なみに普及していたならば、今次

の大会でもこれだけの人は集まらなかつたであろうということなのである。

私は平素、私たちの保存会のなかで、一絃琴が珍しいという理由だけではやされることは甘えでいてはならない、と常に会員たちを戒めてきた。ただ古くて珍しいというだけならば、南方の土人の音楽と選ぶところがないのである。一度聞いたもう沢山だといふものではなくて、何度も繰返し聞きたくなるような音楽としての鑑賞に耐え得るだけに質を高めねばならぬ。そうしてこそ、一絃琴が邦楽のジャンルとしての存在を認められるようになるはずだとも説いてきたのである。

過去十年間、私は同志のかた達とともに、須磨に生まれたといふ郷土芸能一絃琴の復興に普及のために情熱を燃やして來た。今次の大會も一絃琴のための啓蒙運動の一環として企画したものであつた。そして、今後もますますその普及のための努力をつづけて行きたいと考えているが、全国各地で一絃琴の清雅な響きが聞かれる日の到来が私たちの夢なのである。それは、一絃琴を珍しい芸能でなくする道である。すると、先の社長の言葉を裏返して考えれば、私たちが努力すればするほど、次の大会には人が集まらなくなると



須磨寺で開かれた一絃琴の会

いう結果になりかねない。自家撞着とはこのことであろうか。私は大会が成功に終った今、奇妙な感概にとりつかれているのである。

六月のみどり

林 中元

（教育植物園園長）

花の命は短かくて……。春、四月のはなばなしさから、一転して、若葉にうつる。若葉の命は……？ 梢のゆれに驚いて足をとめる。春風もさることながら、梢のゆれるのは、冬の間中、忘れていたようである。

五月、六月、若葉、青葉、翠綠がつづく。そして、紅葉につながる。緑の命は長いようだ、ミドリ、みどり、緑という字をいくつ重ねても、昨日、今日の六甲の若葉は表現しきれないものがある。谷は谷で、嶺は嶺で、とにかく同じ樹であっても、それぞれが、目色（芽）が違う。

再度ドライブを通つてみよう。

トンネルをくぐると、アカシヤの若葉が道を覆う。白い花房が枝垂れしている。鼻をあけよう。甘い香りが、道いっぱい流れている。時に淡く、時に強く、風のみだれるままの香りがそのまま清氣、生氣、精氣をかきたてるようである。延々と、つづいて、布引水源

池が見える。一本松点までが、甘い道、匂いの道である。水源池を越えた東南の山々、市内では丸山から抜けて、白河に至る瘠地の砂防林、アカシアのみごとな若葉が車の窓をあけさせる季節である。

一本松を過ぎると、緑の零するを感じる樹陰帶。ドライブの味を満喫させる陰がある。クスノキの樹林だ。このクスノキは、水を貯めるための保安林として植えられたものである。五、六十年の結果をしっかりと胸にしまつてもらいたい。植林は一日で育つものでなく、五年、十年のものでもない。

樹齢の短い桜の五十年の姿は、枯死寸前のものとなるが、クスノキの樹齢は五百年を越えている。相楽園のクス、摩耶小学校のクスが

それである。ここにクスノキは、これからあと何百年とつづいて、多くの人々をいやすものとなる。

今生きている私共も、この恩恵を受けねばならない。

花は貧しいが、そのかわり、若芽の美しさが花に倍する。すばらしいものである。一枚の葉ではなく、一本の樹でなく、群れを見てほしい。近くで、見るのはなく、遠く離れて見たいものである。樹海といふことがある。そこには葉に隠れてつましいが、若葉は太陽に輝いて、色とりどり。

再度公園に至つて、アカマツの幹を透した雜木林の若葉の舞い。クロマツの幹を透した若芽の乱れ。アカマツ、クロマツの交錯の中の幹の春の冴え。このドライブウェイは、六甲の至る所で見られる谷間尾根道の一部にすぎない。

あなたと、青葉若葉の日的是りである。花は一輪一花を賞じることができる。手折られる機会も考えられる。この緑の海原の豪華は花にまさる勢いがうかがわれる。

咲いて散る花、芽から、日々成長して伸びる葉、花の命は短かくて……。

葉の命の長くて、生きる欲びの多いことよ。

若葉は緑と決めてはならない。山も奥にはいつたといふ感じのするところに、内陸型の（海岸性に対しても）アセビが顔を出す。

アセビの花の純白に対応するよう、若葉も赤芽、黄みどり芽、緑芽がある。アセビは、大竜寺の谷間、樹陰から現われ始める。花は葉に隠れてつましいが、若葉は太陽に輝いて、色とりどり。

再度公園に至つて、アカマツの幹を透した雜木林の若葉の舞い。クロマツの幹を透した若芽の乱れ。アカマツ、クロマツの交錯の中の幹の春の冴え。このドライブウェイは、六甲の至る所で見られる谷間尾根道の一部にすぎない。

あなたと、青葉若葉の日的是りであり、淡緑であり、黄み

□ ある集いその足あと

伴 須美

フラメンコ舞踊団

伴 須美

（伴須美フラメンコ舞踊団主宰）



舞踊団のリハーサルから

ひとりの人間が踊ることで示した怒り、あるいは楽しさ、それを見る者が共感できる時、その踊りはほんものといえる。私たちは自分の心を表現したいがために踊り続ける。

しかし、見る人が舞踊に心を感じ動するまでになるには、その舞踊を生かせるだけのテクニックがなければならぬ。フラメンコ舞踊の基礎テクニックは、決してたやすく体得できるものではない。

足の打ち方、パリージョ（カステネット）の音、腕の使い方、指先の動き、裾さばき：身体のすみまで一分のスキもなく、同時に神経が行きわたつていなくてはならない。手の動きで、足の打ち方で喜びの、苦しみの微妙な感情を伝えなくてはならない。スペインのすぐれた舞踊家ロサリオほどにもなれば、本能の命じるままに踊つて、それがまさに優雅に、見るひとを感じて感動でつき動かすまでに完成されたものであるが：

私は、好きだからフラメンコを踊る。自分をなにより正直に表現できるフラメンコを、好きだから踊る。ただ踊りたいだけ。死ぬまで。そして少しでも完成への高みに届くための努力を続けるだけ。

芸術はなんでもうだと思つけれど、フラメンコ舞踊は人間の心の表現である。ひとが生きていくうえでの苦悩、喜び、哀しみ、情熱……喜びはまた苦悩につながるものもあり、スペインのアンダルシア地方に古くから伝わるこの舞踊は、どちらかといえは、鬱屈した感情を念出する表現の方によけいの激しさを持つていたといえるかも知れない。

これはこの人のフラメンコになっている、と感じてもらえるようになれば、すばらしいことだ。

踊りを見て、人間の生きていく命の流れ、そういうものを見るひとに共鳴させることができれば、その踊り手は成功したといえる。

私自身、はじめてスペインへ渡った時、涙しながらフラメンコを見た。ほんとうのフラメンコ舞踊にはじめて触れたようでがく然とした。私はそれまでに日本で10年間スペイン舞踊をやっていた。もうフラメンコなんて止めてしまおうか、それとも、もういちど初步からやり直すか、その時の決意が私の出発点となつた。

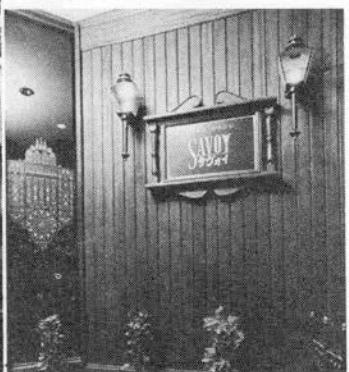
スペイン人は純朴である。スペインにいる方が私は落ちついてしまう。フラメンコを見ても、そのなかに東洋的な、日本と共通するものを感じる私であるけれど。

私は今また、スペインへ行く予定を持っている。今度は勉強のためだけでなく、私の師であるロサリオが、スペインで私のリサイタルを計画してくれている。来年のちょうど今頃。そしてその成果をまた神戸の舞台に乗せることができると思う。

■伴 須美フラメンコ舞踊団
神戸スタジオ 神戸市長田区明翠町1丁目3
691-4739 東京スタジオ 東京都板橋区板橋2丁目7-9
2982田沢千代子方 03-961-961



新しいと
ゆうことは
いつまでも
古くならない
ことです。



NIKKEN MEMORY SERIES<5>



カクテルラウンジ
サヴォイ
小林省三

「いい店じゃないか、やっぱり神戸だな。」初めてサヴォイにみえたお客様の多くが店内を見回して、そうおっしゃる。この4年余り、どれだけの方からそういうわれたことだろう。その言葉を聞く度に嬉しい思いをし、自信を深めさせて貰っている。実用面でも2階以上の店が一番心配する防水面も完璧である。店側の人間とすれば約10時間位は店の中で過ごすのだから、こちらの快適性と趣味性を大事にしたい。しかし、お客様が感じる店の魅力はそれとは別の場合が多い。その二つの必要点をいかにうまくカクテルするかが、店作りの腕だと思う。その点での日建スタッフの腕だと思う。その点での日建スタッフの腕は趙の字付きの一流であると断言する。改裝の時も絶体日建だが、残念というか辛いというか、ここしばらくは大改裝の必要がない。私の顔の造作の改裝を先にやって貰おうかな。

店舗づくりのプロフェッショナル

信頼される



(株)神戸日建

神戸市葺合区御幸通3丁目1

PHONE 078(251)3525(代)

このたびは、火災の為、皆様には御迷惑をおかけしましたが、おかげさまで平常通り営業致しております。御見舞、有難うございました。今後ともよろしくお願いいたします。

終らない賭け

矢崎 泰久

〔話の特集編集長〕

え・小西保文



「ア」
明子の口から、かすかな声がもれた。体を固くして、
しがみつくように強く腕に力を入れている。眼はずっと
閉じたまま。まるで、セックスを儀式とでも思つてゐる
のではないか。

「ア」
のどの奥から、しぼり出すように、再び声をあげた。
明子は、依然として、体から力を抜いていない。熱い部
分だけが、息づいている。形のいい、しまった乳房が、
かすかに揺れている。

「あなたを好きになってしまいそう」

明子の中で、私がはじけたとき、かすれた声が耳元で
囁いた。言葉の底にある、明子の心が伝わってきた。私
は、更に強く明子を引き寄せ、荒い呼吸を押さえなが
かすかに揺れている。

ら、やさしい口づけをした。密の甘さと、塩の辛さが、
舌の先をしびれさせた。

ボーカーが好きだ。ことにブラフで勝つときの喜びは
格別である。あらゆるゲームは、自分の手が良い場合で
なければ勝てない。ボーカーだけは違う。悪い手であつ
ても、勝負に勝つことができる。そのためには、相手の
心理を読まなくてはならない。そして、自分の手を知ら
れないように、細心の注意を払う必要がある。

ごく稀に、よい女にめぐり会う。抱きたいと思う。し
かし、恋におちるのは、とても面倒だとも思う。恋をす
れば、何をかも捨ててしまう自分がこわい。できるだけ
軽く、女と触れ合つて、さりげなく別れたい。四十を過
ぎると、悲しみや苦しみに弱くなる。さりとて手放しで

泣けるほどの純情もない。

正面きって向い合っていくのなら、男と女の関係も、それほどテクニックは知らない。よい手が入ったときのボーカーと同じだ。堂々と戦っても勝てる自信はある。

はじめから別れるつもりで、しかも、しつとりとした情事を持ちたいという欲望がある。身勝手で、欲張りで、それがわかっているだけに、ひどくうしろめたい。

明子は、体の線の美しい娘だった。細つそりした外見ではあつたが、内側に丸く肉がついているように感じた。整つた顔つきは、やや冷たいものを与えるが、笑顔がすばらしかった。上品さの中に、妖しい魅力があつて、じつと見つめていると、心が吸いとられてしまいました。

したい、と思った。だが、ちょっと間違うと、のめりこむ、とも思った。だから、これはブラフで攻めてみるしかない。とことん賭けてくるようであれば、深傷を負う前に、こちらがダウンすればよい。しかし、そんな気持を見すかされたら、はじめから勝負にならない。いい手があるように、自信たっぷり、はじめの賭けをやらなくてはならない。

明子はテレビディレクターである。神戸の第四突堤に停泊中の英國豪華客船『クイーンエリザベスII』の取材で東京から数人のスタッフと共に来ていた。初対面ではなかつたが神戸で会つてみると、何かしら親しいものを感じて、私たちは『アルバトロス』で夜更けまで酒を飲んだ。ジャズの生演奏がすつかり気に入つたらしく、明子は、楽しそうだった。

「ね、今度神戸へ来るのはいつ。私も、そのとき来るわ、街も坂道も港も、そして、いろいろな店も、全部好きになつたの、でも、あなたと一緒にたら、きっと楽しいと思うのよ。ね、いいでしょ？」

「国営放送は、そんなにヒマかい」

私は、その場限りのジョークと受け流して皮肉っぽい

返事をした。明子は、黙り込んでしまつた。私のブラフは、まず成功したようであつた。あとは、おなじみのボーカーフェイスというわけである。

『キヤンティ』でチーズパンを食べていると、明子が入ってきた。一ヶ月ぐらい経つてゐる。

「探しちやつた。だつて、この店、本店と支店とあるんだもの。エトランジエには、ちゃんと教えるのが礼儀よ」

クレージュのスポーティなパンタロン・スーツが、よく似合つていた。

「ね、わたし神戸へ何しに来たと思う」

明子は、はしゃいでいた。

「そんなことわかつてると、俺にいわせたいの」と私。

「あら、絶対にわからぬわよ。いってみて」

私は、じつと明子の眼を見つめながら、ちょっと間をとつてから、

「俺に抱かれるため」といつた。

明子は不意をつかれたように、私を見ていた。手にしたワインを思いきりよく飲んで、グラスを置くと、両手を頬にあてた。

「わたし、もう赤くなつてゐみたい。」

神戸でだけ会う。私の情事は、ボーカーのゲームのように、順調だった。手の中にあるカードは見せない、これが私の誇りだった。ある日、明子と港を歩いていた。初夏というのに、六甲おろしの風が冷たかつた。

「終らない賭けもあるわ。はじまらない恋を背負つて漂流するつもりなら」

明子が、突然、詩を詠むような調子でいつた。私はガラガラと音を立てて巻きあがられる碇を横に見ながら、自分の敗北を知つたのだった。

（終り）

鉄粉と石、砂と水槽

河口 龍夫（造形作家）

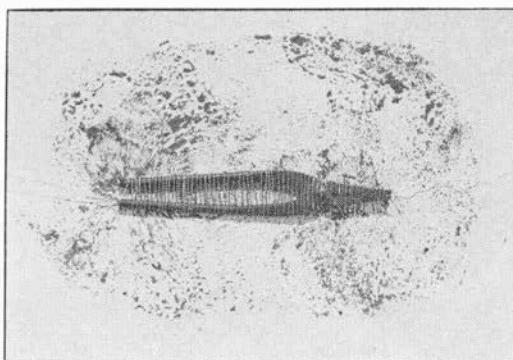
パリ市街の散策を続いている間に、ようやくにして、I・A・T運送会社より日本から送った作品の材料と道具類の荷がパリ・ビエナーレの会場に届いた。

その荷を見た時、なつかしくうれしかった。荷を注意深く解き、作品材料が破損していないか一つ一つ点検しながら床に置いていった。まったく破損はしていなかった。ひと安心だ。あとは日本で用意できなかつた材料を購入すればよいわけだ。

ところで、私の展示空間の電気配線が、今だにできていなかつた。まだまだ待たされそうだ。

そこで、時間の都合や、用意しなくともパリにはかならずあると思われたため買い求めなかつた材科の購入を始めた。

すでに、変圧器の用意は、一〇〇ボルトの電流を配電してくれることで購入の必要がなくなつたことは以前に言つたが、その他に、〈Relation·Electric current〉（関係—電流）と題する作品は、鉄片や銅片を床に置いたり、壁面に立てかけ



〈Relation—Electric current〉（関係—電流）の磁界の部分

たりして、電気を直接それらの物質に流し、それぞれの物質が接点を持つことによりつながり、大きな磁場ができるとともに、電流によって結びつけられた一つの〈関係の場〉が出現するのであるが、その流れの一箇所に、ペンチに銅線をコイル状にまきつけ、ペンチの形状の磁界を出現させる手順であつた。しかも、その状態を視覚化するために、どうしても鉄粉を必要としたのであつた。

〈Relation—Energy〉（関係—エネルギー）と題するスケールの大きな作品には、その一つのパートとして、熱を十数箇の石に伝導させるため、人間の頭ぐらいの大きさの石を必要とした。また、別のパートとして、水をパイプヒーターの熱で水蒸気にするための容器として、直方体状の金魚鉢を用意したが、スペースの広さとの関係で、もう少々容積の広い水槽が必要と思われた。

とりあえず、配電を待つていてる間に、鉄粉と石と水槽を求めに行くことにした。といつても、神

戸でなら、鉄粉はどこか知つてゐる鉄工所で、石は六甲山のふもととか、川のほとりで、水漕はどこそこデパートの金魚売場とうまくゆくのだが、地理不案内の上、言葉が不自由ときてゐるので困つてしまふ。ノートルダム寺院に行くとか、どこか観光地に行くほうがはるかにやさしいようだ。もし、通訳の正木氏の協力がなければ大変であつただろう。

まず鉄粉は、パリの郊外まで出かけて、鉄工所らしきところで拾い集めたりしたが、いずれも大きすぎて磁界を作るには不適当であつた。もちろん、鉄粉など売つてゐる店は、長年パリに住んでゐる正木氏をもつして見つけることはできなかつた。次に石であるが、石といつても私の求めているのは、自然石であつて、岩を人工的に砕いた石ではなかつた。つまり、それ自体で一つの完結し、自立した形態を持つてゐる石がほしかつたのであつた。実は日本で必要な数だけ石を用意したのであつたが、ある人から「石ころぐら、パリにだつてあるよ」と、アドバイスを受けたため、パリへ送付する荷の中から石は除外されたのであつた。ところが、パリには、自然石のようないわゆる石ころは、かいもく見当らなかつた。パリ市を流れてゐるセーヌ河は泥で、石ころなどなかつた。私がパリ市内で、求めるイメージにちかい石ころを見つけたのは、ガソリン・スタンドに裝飾として配列されている石であり、日本大使館の中庭にてであつた。

日本大使館と言えば、パリに着いて間もなくビエンナーレ参加メンバーと共に挨拶に出かけたのであつた。なにしろ国費で参加できたのであるし、ホテルの手配など色々とお世話になつたもの

だからその御礼もあつた。その時、大使館の人に「ひとつお国のために、頑張つて下さい」と言われたのを奇妙な気持で聞いたのを思い出す。

もし、石が手に入らなければ、大使館の石ころを頂くか、ガソリンスタンドの拌借するしか仕方がないようだつた。今度は水漕であるが、パリ市内の金魚屋をかなり見てまわつたが適当な大きさの水漕はなかつた。ところで、金魚を売つてゐる店には、犬や猫や鳥も売つてゐたが驚いたことにコーギモリをペットとして売つてゐる店があつた。

結局、鉄粉は、日本から持つて來た鉄片をヤスリで根気よくこすつてつくるしかなかつた。

そして、石ころは、たまたま私の展示部屋の両隣が韓国の作家で、その内の一人が自然石を作品に必要としていた。どこでどう見つけてきたのか石ころを手に入れ、親切にも私の分まで用意してくれたのだ。いつたいあれだけ搜して見当らなかつた石ころをどこで見つけたのだろうか。何のことはない。聞くところによると、建築材料屋で一袋何がしかで買つて來たのであつた。

理想的な水漕は、求められなかつたので、日本から持参した金魚鉢を使用することにした。

アトリエで作品を完成させ、その完成した作品を展覧会に出品する場合には、くどくどと記したような苦労は生れなかつたであろう。今回のように現地で材料を求める、或は送付した材料で、その現場で作家が制作することによつて成り立つよう、展示空間と密接に関係をもつ臨場的作品の場合は、さまざまな問題が生じてくるのだ。しかしながら、現実の時間や空間そのものを作品の重要なエレメントと考へる私の場合、その困難さを克服することが、必要不可欠な問題であつた。

経済ポケット ジャーナル

★若手経営者の集まり

「神戸経営研修会」設立

このほど、神戸市の中堅企業の経営者ら十五人が「神戸経営研修会」を設立した。これは、角南猛夫角南商事社長、玉井新吉神戸船渠工業社長、野澤太一郎ノザワ社長の三氏が発起人となつたもので、中堅企業として経営のやり方などの情報の交換などをを行い、積極的に神戸経済の基盤を支えて行こうというものである。

現在のところ先の三氏以外のメンバーは次の諸氏である。

上島達司上島珈琲本社社長、岡崎藤雄内外ゴム社長、川西章一川西倉庫社長、小林博司小林桂専務、白川寛お菓子のコトブキ社長、瀧川博司兵庫トヨタ自動車専務、竹田剛男関西貿易社長、寺本滉路屋専務、東中弘吉同公認会計士事務所長、西川実大阪西川副社長、嶋広敏ワールド社長、義和尾道造船常務。

★さんプラザ五周年を迎える

三宮の中心地にさんプラザがオープンして満五年を迎えたが、5月28日午前11時から、さんプラザ二階「九龍」にて五周年記念パ

ーティーが開かれた。



あいさつをする横山社長（左はし）



発については、さんプラザをはじめ、三宮周辺のみなさんが中心となつて欲しい」とのあいさつがあつた。その後、各界からのお祝いと今後の発展への期待の言葉がのべられ、小山常務の音頭で乾杯、会場に集つた約百名は歓談のひととき

を楽しんだ。

★「海からのたより」完成

五月十一日、神戸市でライオンズクラブ国際協会302W-C地区第21回年次大会が開催されたが、これを記念して在神16ライオンズクラブの会員の醸金によつて国鉄神戸駅前広場につくられた「海からのたより」

塔の背後には新宮氏の詩「海からのたより」が刻まれた板がはめ込まれている。が開催された。



「海からのたより」の除幕

記念塔の除幕式が行われられ、新宮氏と宮崎神戸市長の手によつて除幕が行われた。このあと会員一行は大倉山中央体育館まで行進、神戸文化ホールで大会

が開催された。

塔の背後には新宮氏の詩「海からのたより」が刻まれた板がはめ込まれている。が開催された。

★KOBEオフィスレディ★



河本留里さん（北区）
朝日麦酒株式会社経理部

現代的な美人タイプの女性。高校時代に水泳の飛び込みをやっていただけに、プロポーションも抜群だ。さぞかし水着姿もお似合いだろうと思われる。「体力には自身ありよ」というのもうなづける。当社には一昨年3月入社。経理の仕事もてきぱきとこなす。旅行が好きで土、日曜を利用して遠出することも多い。只今、理容学校へ通っているのだが、どうも未来のhusのためらしい。（武庫川短大卒）



◆住友信託銀行

もとまち

大丸西向い 321-1131(代)



ボーナスは

住友の**賃付信託**へ



魔法をかけられた町

多田 智満子 〈詩人〉
え・山本 文彦

長年ここに住んで居ながら、神戸という町は、生身の人間が生活している町というよりは、なにやら非現実的なメルヘンの町「魔法にかけられた都市」という感じがする。

山の麓から海岸まで、積み木のような家がびっしりと土を覆っているが、或る朝それらが斜面を這い登って中腹にまで達したと思うと一夕の大雨に土砂と共にすり落ちる。

南北にはしる道はすべて坂道であり、それが少し歪んでいれば、忽ちほどけかかった螺旋となつて、未知の高みへ人を誘う。或いは逆に、その道はうねりながら低きへと向かい、海拔ゼロメートルの地点をこえて、海の深みへひきすりこもうとする……。

というのは、この街全体が海に向つて開かれているからだ。海と陸との境界は櫛の歯状の突堤の凹凸で人工的に仕切られているが、そこには一夜にして塔が立ち、またそのあくる日には、忽然として波間から島がもりあがる。

ポートアイランドと呼ばれるこの島が何年がかりで出来たか知らないが、私にしてみれば、或る日気がついてみればそこに島があつた、というわけで、まるで魔法としか思えないのである。

そして日夜、美しく塗りたてた客船や貨物船がこの港を出入りして、様々な髪色と肌色をした人たちや多様な商品を送りこみ、運び去つてゆく。人間がそこに住むというよりは、珍しい、心をそそる人間が通過する町、そうした港町として、神戸はつねにメルヘンの相のもとにある。

